

正しく使用するための 医療機器研修会の取り組みについて

座長 齋藤 雅典[†] 山崎 弘子*第69回国立病院総合医学会
(平成27年10月2日 於札幌)

IRYO Vol. 70 No. 11 (447-449) 2016

要旨

医療機器安全管理料算定条件のひとつに、「医療機器の安全使用のための職員研修を計画的に実施すること」が求められている。研修会の第一の目的は医療機器に対するスタッフの知識がレベルアップすることであり、医療機器研修会を開催することが義務的や形式的であってはならない。正しい知識による医療機器の操作は確実な医療安全を提供し、その結果として患者への安心と笑顔につながることとなる。臨床工学技士へ医療機器研修会の企画から開催までを院内全体や看護部など他部門から依頼されることは少なくない。臨床工学技士による医療機器研修会は、依頼者側からの要望点や臨床の状況に合わせられるなど研修内容を独自に作り上げられることや、費用負担が軽減できるなどのメリットがある一方、開催時間や使用物品の制限や事前準備負担増などのさまざまな課題をひとつずつ解決していかねばならない。

今回、臨床工学技士の立場から南岡山医療センター 笠井健一氏、千葉医療センター 高橋邦仁氏、看護部の立場から北海道医療センター 深井博昭氏、医療安全管理の立場から弘前病院 坂本浩志氏より、研修会開催の現状や問題点ならびにそれらの対応策や工夫点などをご発表いただいた。その後、医療機器研修会の進め方や効果のある研修会にするにはどうすべきかを検討した。その結果、事前に研修の目的および習熟到達点を定めるために依頼者あるいは受講者と相互のコミュニケーションをしっかりと取ること、研修時間の効率的な使用や研修の効果を上げるための最善の方法を選択すること、研修後の評価および習熟度の確認が重要であることがあげられた。

キーワード 臨床工学技士, 医療機器研修会, コミュニケーション

はじめに

医療機器を正しく安全に使用することは、患者の

生命維持や医療行為への適正な提供に直結することになり、そのためには使用者の熟知した知識が必要である。知識を習得するために開かれる院内研修会

国立病院機構あきた病院 臨床工学技士室 *国立病院機構九州医療センター 看護部 †臨床工学技士

著者連絡先: 齋藤雅典 国立病院機構あきた病院 臨床工学技士室

〒018-1393 秋田県由利本荘市岩城内道川字井戸ノ沢84-40

e-mail: cesaitom@hosp.go.jp

(平成28年2月29日受付, 平成28年6月17日受理)

Training for the Correct Use of Medical Equipment Safety Initiatives

Masanori Saito and Hiroko Yamasaki*, NHO Akita Hospital, *NHO Kyusyu Medical Center

(Received Feb. 29, 2016, Accepted Jun. 17, 2016)

Key Words: Clinical Engineer, medical equipment workshop, communication

は、院外研修会に比べると時間的な負担や参加費などの金銭的な負担を抑えられるなどから、参加しやすく依頼者側の要望に合わせた研修内容にすることが可能でありピンポイントに絞った研修が行えるなどのメリットが多いと考えられる。それらの理由により医療機器管理に携わる臨床工学技士が病棟や医療安全管理室などから依頼を受け、医療機器に関する研修会を企画し開催することは少なくない。医療機器安全管理料算定条件のひとつに、「医療機器の安全使用のための職員研修を計画的に実施すること」と記されている。しかし、よりためになる研修会を行うことは、義務的や形式的であってはならず、患者への医療安全を提供するためのひとつの方法であり、安心、笑顔につなげなければならない。今回、第69回国立病院総合医学会において、医療機器研修を行う立場から臨床工学技士2名、依頼者、受講者の立場から医療安全管理係長と看護師とのシンポジウムを行う機会を得ることができた。座長として、各者の講演の概要と討議内容をまとめた。

医療安全管理室

臨床工学技士業務と医療安全管理業務とは、非常に関連が深い。坂本浩志氏によると医療の高度化や多様化にともなう医療機器が導入される昨今、知識不足や不適切使用によるインシデントが数多く報告されている。安全な医療を提供するためには研修会を通して医療機器の知識や操作法を理解させることが不可欠であり、医療安全上の再発防止につなげる必要もある。研修準備段階から評価までを一方向ではなく、双方向からのコミュニケーションが重要である。講義方法は座学だけではなく演習形式を取り入れることで、より効果的で医療安全面の向上につながる研修会となる。研修会後には行動変容に対する評価をし、職場長や臨床工学技士と医療安全管理係長間で連携をとり、継続的に職場内トレーニングを実施することも重要である。さらに研修会後のアンケートや確認試験を実施し、その結果を次回研修会へ活用している。

看護師

北海道医療センターICU看護師への研修会は、テーマに沿って医師、臨床工学技士、医療機器メーカーなど、多職種に講義を依頼していた。その中で

臨床工学技士へ依頼する研修会の内容は、生命維持管理装置の原理や構造、トラブル対応が中心であった。依頼をする時に研修会の目的や考えを明確に伝えたことで、受講した看護師は専門知識を深めることができたようである。

深井博昭氏のお考えとして、研修内容を実務に反映させる習得レベルの到達目標設定について依頼者側と受領者側の相互コミュニケーションを密にすることが重要であり、そのための相談しやすい環境作りが必要であると指摘された。看護師が研修会を受講し知識を深めるだけでは、それを実際の臨床業務へ活かすことができることは別であり不安が強い。その不安を払拭するには実際の状況に近いシミュレーションも併用して行うなどさらにステップアップした取り組みが必要と考えていた。

臨床工学技士

笠井健一氏は実機使用による体験型研修会や実際に起きたインシデントや不具合を実例に挙げた研修会を、高橋邦仁先生はチェックリストという身近なものを活用した研修会を行っていた。どちらも効率的で業務に結び付けられる研修会を目指している点がかがえた。研修会の企画段階では目的や克服課題と習得レベルの到達目標をはっきり設定する必要がある。さらに、依頼者や講師そして受講者などの関係するすべての者が協同した研修会を作り上げていくことが重要であると考えられていた。高橋氏は理想の研修会とは楽しく勤務時間内の短時間で新しい知識が得られレベルアップが実感できることなどがあげられるが、大変困難なことである。そこでさまざまな制約の中で効率よく一定の効果を上げるために、チェックリストを活用した研修会を企画することを考えられた。配布資料として絶対に理解してほしい項目をリスト化し明確化することで、短時間でも効率的に要点を理解してもらえるように工夫していた。しかし、講義対象の医療機器によっては専門的知識が必要な場合も多く、チェックリストへの依存が過剰にならないようにバランスを考慮した研修会にすべきと考えられていた。笠井氏は研修会の企画段階においてターゲットとなる受講者の絞り込みを行い、研修時間と開催時刻そして研修内容のレベルさらに大人数による知識重視型か小グループによる実践重視型かなど細かく組み立てていくべきと話された。研修会後のアンケートの他にその場で受

講者の疑問に解決できるような時間を作るだけではなく、感想を受講者から直接聴くようにすることで説明不足箇所が明確になり今後の講義内容の材料にもなり得ると考えられていた。

シンポジウム

研修会の企画段階において必ず行わなければならないことは研修会依頼者そして当該職場長やスタッフと綿密に情報を交換し研修目的を共有することである。その時に研修方法や受講対象者の経験年数、習得達成レベルの設定などの相互の意見を出し合い決めておくべきである。研修テーマにより座学や体験型、もしくはグループワーク形式などさまざまな選択肢から最善な方法を選ぶこととなる。

座学研修では一方的に講義をするのではなく、受講者との距離感をできるだけ近くし内容を理解しているか細かく確認しながら行うべきである。最重要点や理解しにくいところでは時間を割き、別の視点から説明するなどの工夫が必要である。どのような研修方式であれ、研修会で得た習熟度の高い知識が臨床業務に活用できるようになることが目標となる。

研修会後の評価を講師だけではなく研修会依頼者や当該職場長そしてスタッフとともに行うことは、今後の研修会をよりよいものにするためにとても重要な作業である。研修会終了後に受講者へアンケート調査を行うなど、その結果を次回開催への改良データとするべきである。確認試験を行った場合は問題ごとの正答率からどの内容の理解度が低いのかを分析し、受講者へ通達できれば知識習得の不足部分を補うことができる。もしくは、研修会後は職場内トレーニングへと移行させて継続的な学習につなげ

ることで安全で正しい医療サービスの提供が期待できる。

ま と め

今回、それぞれの施設でさまざまな工夫の下に医療機器研修会を開催していることがわかった。研修会を行う側と受ける側からの要望や考えをこのシンポジウムで出し合った結果、それぞれ共通の認識と同じ目的を持っていたことがわかった。

臨床工学技士養成校では研修会を企画し開催するカリキュラムが含まれているところは少ない。昨今、国立病院機構グループが主催する新規採用臨床工学技士研修会や医療安全対策研修など、院外からの講師依頼も徐々に増えつつある。国立病院機構もしくはグループ内で、このような臨床工学技士や他の医療スタッフが行う研修会を企画開催する側のノウハウの習得やスキルアップを目的とした研修会のプログラムがあればよいと感じた。

最後に、「よりためになる研修会」とは、受講者のスキルアップが最終目的ではなく、その先に患者の安全があり、そして安心と笑顔につながることでありと改めて感じることができた。

〈本論文は第69回国立病院総合医学会シンポジウム「よりためになる研修会って？～正しく安全な医療機器の取り扱いを目指して～」として発表した内容を座長としてまとめたものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。